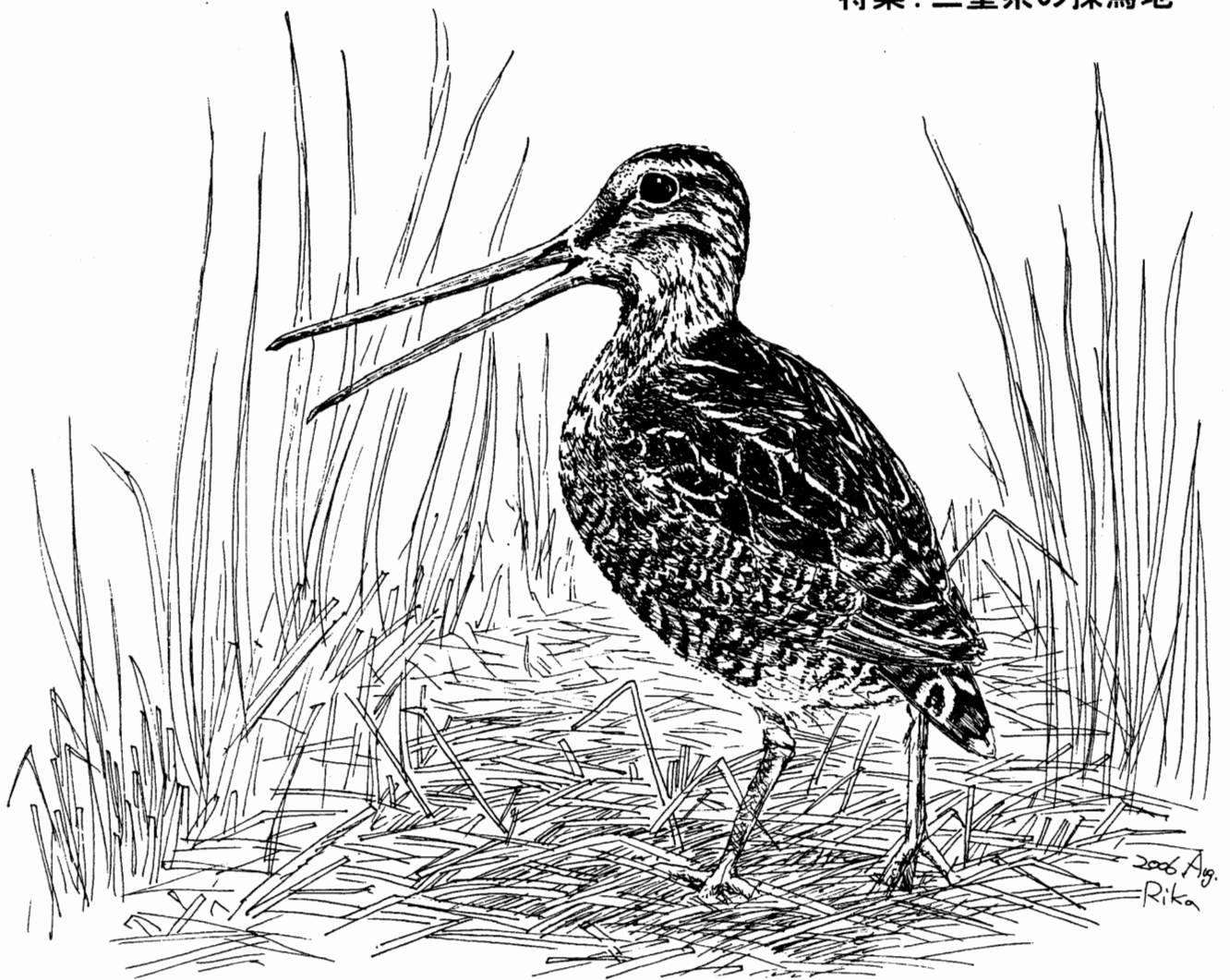


しごこ

第52号

特集：三重県の探鳥地



2006年10月 日本野鳥の会 三重県支部

<http://www.amigo2.ne.jp/~miebirds/>



万葉人と野鳥

加藤光広(桑名市)

バードウォッチングに出かけた時、この鳥はどうしてここにいるのだろうか。と自問して、周囲の環境、季節、採餌条件等々を考えてみる... 野鳥との出会いは今では戻らぬ自分の過去を思い起こしてくれるものだけなのか。鳥よ。未来志向の青年になるべく小生のための囀りの声を聞かせてくれ。

拙文では野鳥と人々に関わることを、万葉集の中から野鳥を詠んだ歌を、春の鶯から冬の鴨まで10首を引いて綴ってみたい。小学、中学、高校時代に習ったものの中でも特に印象に残っているものを取り上げた。高校を卒業してもう40年以上経ったが。

巻8.431「百済野の萩の古枝に 春待つと居りし鶯 鳴きにけむかも」山部赤人

百済野とは朝鮮半島の古代国家百済からの渡来人が住んだところであろう。奈良県には渡来人に関連する遺跡がたくさんある。奈良県のナラとは朝鮮語では国という意味だ。萩は万葉人が植物の名を歌に読み込んだなかで一番多いそう。去年もやってきた。そして今年も。鶯の囀りを聞き始めるころこの歌が思い出される。まだ囀りの下手くそな鶯であるが。

巻19.4292「うらうらに照れる春日に 雲雀あがり、心かなしも。独りし思へば」大伴家持

春爛漫の折、雲雀が囀りながら空高く舞うとき、家持はどうして「心かなしも。独りし思へば」なのか。十代当時の自分には理解できなかった。しかし今ではその心境が痛いように判るときがある。

目次

表紙の言葉2
巻頭エッセイ2
特集：三重県の探鳥地
特集によせて4
御池岳の鳥4
町屋川下流域の野鳥たち5
野登山発作的探鳥記6
阪内川河口7
伊賀地方の探鳥地7
お熊ヶ池の紹介8
会員のページ
九州御池、ヤイロチョウの森9
「かきくけこ」は若さの秘訣10
霧が峰探鳥旅行13
アートギャラリー14
支部活動のページ16
野鳥記録20
探鳥会報告21
編集後記22

表紙の言葉

チュウジシギ

小坂里香(度会郡度会町)

鳥たちは、季節がめぐってくれば約束違わず、渡ってくる。今年も出会えるだろうか。ときめきながら、いつもの場所へ。稲刈りの終わった静かな田んぼで、お目当ての鳥との再会に心躍らせる。

ところで、田んぼは労働と生産の場である。鳥を見におしよせる人々が、農家の人と軋轢をおこすことがあるのは悲しいことだ。とっておきの探鳥地が禁断の地とならないよう、自戒をこめて。



巻8.1419「神奈備の磐瀬の森の 呼子鳥. いたくな鳴きそ. わが恋まさる」鏡王女

呼子鳥とはカッコウのことだ。夏鳥のカッコウがやってくる季節になった。その囀りに我が焦がれ恋心はますます激しくなるのだ。ストレートに自分の思いを歌っている万葉女性 の心に惹かれてしまう。

巻2.111「いにしへに恋ふる鳥かも. 弓弦葉の御井の上より, 鳴き渡り行く」弓削皇子

巻2.112「いにしへに恋ふらむ鳥は, ほととぎす. けだしや 鳴きし. 吾が恋ふるごと」額田王

上の歌は持統天皇の吉野行幸にでかけた時に額田王に贈った歌である。「いにしへに恋ふる鳥」とは上の歌ではわからないが、下の返歌で決定的に力強くほととぎすだと叫んでいる。この当時ホトトギスは常に昔の世のことを思って鳴くと信じられていたらしい。

お互いに昔のよき日を思い出しているのかもしれない。額田王はもう60才を越えているのだが、万葉集に出てくる野鳥は幾種類もあるが一番多いのがこのホトトギスであるという。

巻6.925「ぬばたまの 夜の更けゆけば, 楸生ふる清き川原に 千鳥しば鳴く」山部赤人

正直言ってチドリが夜鳴いているのを確かめたことがない。そのことを抜きにしてもこの歌は静謐と叙情と叙景を見事にまとめていると思う。高校生の時代に万葉集に惹かれたのはこの歌もその一つだ。清き川原とは月が出ているからであろう。楸(ひさぎ)とはアカメガシワのことである。瞑想してチドリの声に耳を澄ましているのだろう。

3.266「近江の湖. 夕波千鳥 汝が鳴けば, 心もしのに いにしへ思ほゆ」柿本人麻呂

壬申の乱で天智近江朝は崩壊し都は天武天皇の大和に移った。いにしへとは近江朝の時代を指す。「国破れて山河あり」だ。ここでのチドリの

鳴き声は懐古の情を引き出す役割を演じている。このチドリはイカルチドリではなかろうか。

巻9.1791「旅人の宿りせむ野に霜降らば, 吾が子羽含め. 天の鶴群」遣唐使人の母

天平5年に遣唐使の船が難波を発つ時、見送る母親がその子に贈った歌だ。切ない母の思いがジーンと伝わってくる。ツルが羽で雛を包むように吾が子の難儀を救ってくれという母親の願い。母親が子を思う気持ちはいつの世も同じであろう。

巻1.64「葦辺ゆく鴨の羽がひに 霜降りて, 寒き夕べは, 倭し思ほゆ」志貴皇子

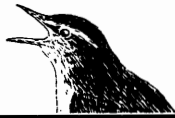
カモは魂の運び屋と信じられていた当時、カモのことを思うことは故郷の妻子たちを思うことにつながるのだろう。「鴨の羽がひに 霜降りて」とは極めて鋭い観察力を有するバードウォッチャーではなかろうか。

巻3.416「ももづたふ 磐余の池に鳴く鴨を, 今日のみ見てや 雲隠りなむ」大津皇子

「雲隠る」とは死ぬことである。天武天皇崩御の後、皇子は伊勢の国斎宮に仕える姉のところに出向いたことが謀反とされ池のほとりで死をたまわっている。池のカモは魂の運び屋でもあり、このカモにこれから死に行く自分の魂を見たのだろうか。死を前にした者の寂しさの極致が「今日のみ見てや」にある。政治の世界に陰謀が渦巻いているのは今も昔も変わらない。

ネズミモチ

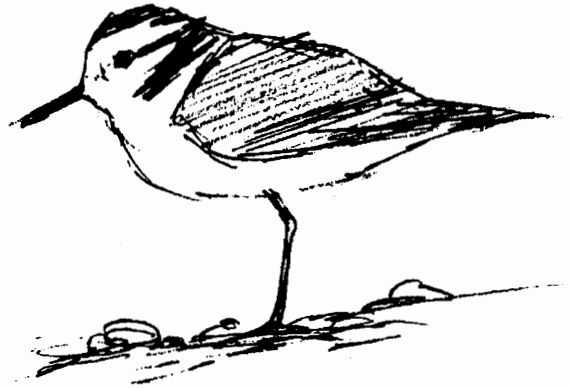




特集：三重県の探鳥地によせて

編集部

今回は三重県内のこれまであまり知られていなかった探鳥地を特集しました。支部のホームページでも紹介されておらず、また探鳥会もあまり開かれていない探鳥地を集めてみました。したがって、公共の交通機関がなかったり、季節によっては鳥がいなかったり、あるいは近づくこともむずかしい場所もあります。鳥たちも人にじゃまをされず、静かに暮らしているでしょう。そっとのぞいてみてはいかがでしょうか。



シロチドリ

御池岳の鳥

村田芳雄(桑名市)

日本シャクナゲの花が咲き始めると、ようやく御池岳にも春が訪れ夏鳥の初啼きが聞かれるようになる。二年程前コグルミ谷は崩落したが、崩落直後は谷底のごつごつした岩を伝って長命水までたどりついた。今は谷の上の方を通る道が、いつの間にかついで楽に通れるようになった。オオルリ、シジウカラ、ヒガラ、ヤマガラ、ミソサザイの声を聞きながら、まだ明るい樹間にちらちらと鳥の姿を見て登って行く。オオルリはまだ二小節程しか啼かない。五月も半ばになり、長命水のテラスで岩の割れ目から流れ出る水で喉を潤し一休みしていると、ツツドリの声が聞こえてくる。曇った日に森の中が薄暗くなると、トラツグミの鳴き声が聞こえてくる時がある。森の葉も茂り緑の風が吹く頃ともなると、クロツグミの金の玉を転がすような抑揚のある囀りが森の中から聞こえてくる。最も楽しい季節である。キビタキの鳴き声はコグルミ谷ではあまり聞いていない。

藤原岳の聖宝寺コースの方でよく耳にする。四月中、下旬に山麓の林の中で囀っているのがよく見られる。耳が遠くなったせいかなヤブサメの音がさっぱり聞こえない。坂本谷が大規模に崩落する前は、坂本谷を登り白瀬峠を経て藤原岳へよく抜けたものだが、崩落する以前の或る日の朝六時頃、谷を登り通称石門をよじ登った所で、灌木の茂みの中からヤブサメの複数の声

が聞こえてきた。じっくり腰を据え朝の握り飯を頬張っていると、灌木の枝にひょっこりと姿を現した。白い眉斑がくっきりと見えた。ヤブサメを見るのはこれが初めてで以後見ていない。

この谷では羽毛を口いっぱいにくわえたヒガラが、すぐ目の前に出てきて道の真ん中にひょいと止まったのに出くわしたことがある。コグルミ谷を少し登って行くとタテ谷の入り口があり鈴北へ続いている。割合静かなコースで、以前マジジロの番が、谷を進むにつれ谷の奥へ奥へと飛んでいくのに出会ったことがある。クロツグミがコナラの大木の枝で20メートル程手前で囀っていたこともある。秋ともなると鹿が出てきてこちらをじっと見ている。白瀬峠から天狗岩へ向かう途中に、コマドリとコルリの囀る灌木と笹の茂みがある。真の谷へ降りて岩がごろごろした谷を、三筋の滝の方へ少し下り、腰を下ろし湯を沸かし、コーヒーを入れていると、目の前の岩の天辺にミソサザイがひょいと現れ、上を向いて尻尾を立てしきりに啼いてくれる。真の谷から御池岳九合目までの途中の斜面に灌木の茂みがあり、コルリの囀りを聞く事が出来る。九合目から頂上までの間しばしばアカゲラの姿を木の間に見かける。誰が放したか、秋ともなると木の実を求めてシマリスがちょろちょろと出てくる。六月になるとボタンブチへの途中、マユミの大木の茂みの上をホトトギスが鳴きながら飛び回っている。姿は木の茂みで殆ど見えない。少し下るとササ原となりボタン



ブチへ続く。ボタンブチでは一人静かに半日ほど岩の上に腰を下ろしていると、鷺鷹にあえるかも知れない。秋になるとアマツバメが群れをなして渡って行き、アトリやマヒワの群れが舞っているのがよく見える。登山道のない東の

ボタンブチあたりから通称T字尾根に下って行くと、コマドリの他にゴジュウカラの声も聞くことがある。御池岳は又花の山でもあり四季折々の美しい姿を見せてくれる。

町屋川下流域の野鳥たち

横山真一(桑名市)

鈴鹿山脈の最北端・三国岳付近に源を発する員弁川はいなべ市を流れ下って東員町から桑名市に入りやがて伊勢湾に注ぎ込む。小さな流れは桑名市に入って通称町屋川と呼ばれる頃には堂々とした川幅と豊富な水量をもつようになり、桑名市の水源にもなっている。

河川改修によって堤防は強固に固められているが、流域が市街地から離れているうえに広い河原と葦原を持つので自然が色濃く残されて生息する鳥たちは多い。

この辺りをベースにして野鳥の観察をされているベテランのバーダーがお見えなので私も定期的に観察するようになり、4年ほどで100種類くらいになった。

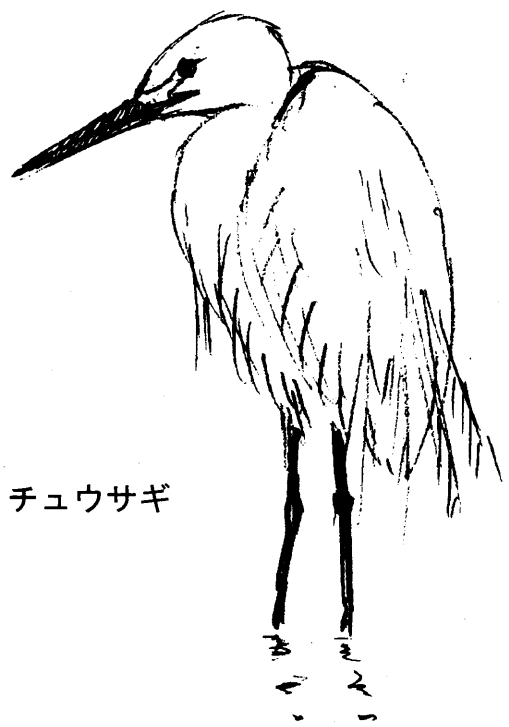
歩くのが好きな私は河口に車を置いて近鉄・JRの鉄橋付近までの左岸側を歩いて往復するが、距離が10 km近くもあるので一日がかりになる。かなりハードであるが時間が有ったら挑戦するのも面白いと思う。

じっくり探鳥するなら河口から国道23号線付近まででも十分に楽しめ、国道1号線まで遡ればさらに楽しめる。季節的にはカモを中心とした冬鳥がやってくる11月から3月の末頃までが良く、一度に40種類以上の野鳥を観察できるが、秋にはノビタキが数多く姿を見せ、春秋の渡りの頃には河口付近の干潟で餌をついばむシギチドリも観察することができる。河口のカモはヒドリガモ・オナガガモが多いが一通りは観察できる。時にはアメリカヒドリも姿を見せて喜ばせてくれ、河口付近に住むカワセミも観察できる。

揖斐川との間の海岸には干潮になると広大な

干潟が出現するが満潮になると水没するのでシギチの生息地に適さないのが残念である。また後背地の田園地帯の休耕田には田植えから稲刈りまで水が張られ、夏のシギチの渡りの頃には中継地として短い期間ながら淡水性のシギチが観察できる。貴重な中継地だが今年は種類も個体数も少なかった。昨年も少なかったが今年は更に少なく、シギチが減っているのではないかと危惧される。地球温暖化の影響を受けているのではと心配だが杞憂に終わって欲しいものである。

このように観察は水鳥が中心になるが、芦原の鳥や時には猛禽も姿を見せてくれる楽しいフィールドである。ここで今会いたいと思っている鳥はツリスガラだ。目撃情報があるので来春は是非とも探してみたいと思っている。



チュウサギ



特集：三重県の探鳥地

野登山発作的探鳥記

辻 秀之(四日市市)

あちらこちらからの夏鳥の便りに気持ちの落ち着かない5月のある日、参加しているメーリングリストに〇さんから野登山(ののぼりやま)報告が入った。ブナの原生林にジュウイチ・オオルリ・コルリ・キビタキ・ヒガラ・ホオジロ・カケス・アカゲラ、なんとオオアカゲラまで、さえずりのシャワーを浴びてきたそうだ。しかもクロツグミは写真付き。

野登山(852m)は鈴鹿の南部、亀山市の水源の山で頂上には野登寺(やとうじ)とか鶏足寺(けいそくじ)と呼ばれる古刹がある。さして標高は高くないが、それでも比較的よい状態でブナ林が残されているのは社寺林として長く伐採を免れてきたからだろう。

ここは車で登ってしまう山で(といってもつづら折れの道の運転は相応の覚悟が必要だが)、登山の対象としてはあまり面白くない。だからこれまで2, 3回トレーニングがてら登ったことがあるだけの山だった。しかし今回の〇さんの便りで鳥見心に俄然火がついた。自宅から頂上まで車で1時間弱の距離、幸い仕事で亀山方面へ出かける用事がある。ついでに立ち寄れないかな・・・



ふと気が付くと車のハンドルを亀山へ向かう道から棚田で有名な坂本の集落へ向けて切っていた。坂本集落からさらに林道に入り20分ほどつづら折れを登ると野登山の頂上に着く。仕事のついでというにはあまりの迂回、さらに車で登山というのも何やら後ろめたい。しかしおかげで歩いては持って上げられない重たいスコープや望遠レンズもある。

まだ朝の光の残る野登山。そろそろと車から降りると早速クロツグミの達者なさえずり。キビタキの鳴き真似を上手に取り入れて、こいつはなかなかの歌い手とみえる。笹の茂る林床ではコルリやウグイスが合いの手を入れる。ジュリジュリと人なつこいエナガの群れ、ジュクジュクはシジウカラの夫婦、口笛でさえずりを真似るとイカルがやってくる。ヤマガラ母さんがくちばしいっぱいくわえた芋虫で巣立った雛を誘っている。ホトトギスがやかましく鳴き立てながら杉の梢を巡回する。遠くカッコウの声。ブナの新緑越しの光線が目によさしく、仕事をさぼっていることもしばし忘れる。

少し歩いてみる。森の中程でキビタキ、梢のてっぺんでオオルリがさえずりのライバル対決。ブナ林をたどる少し頼りない踏み分け道を行くと、青空に屹立した一際高い立ち枯れの針葉樹。ケッケケツツの声、もしやお前はオオアカゲラ。一番高い枝に止まってしきりに羽づくろい。望遠レンズを向けて、この日初めてのシャッターを切る。この時間と空間、すべて独り占め。フフフ、満足じゃ。

発作的に思い立っての探鳥から一ヶ月近くが経った。今振り返ると夢を見ているようなふわふわとした心地で、なんだか本当の出来事だったのか実感がない。自分のとっておきとして、毎年5月が来たら確かめに行こうと思う。

(野登山へは、鈴鹿川の支流安楽川にそって県道を上り、ライオンズゴルフ倶楽部の入り口を過ぎた所で右に折れ新道に入り、坂本の集落へ向かいます。集落を過ぎ、鈴鹿市との市境付近のT字路で左に折れるとあとは1本道で山頂まで車道が続きます。ただし、つづら折りの道で、運転には注意してください。徒歩で登る登山道もあります。=編集部)

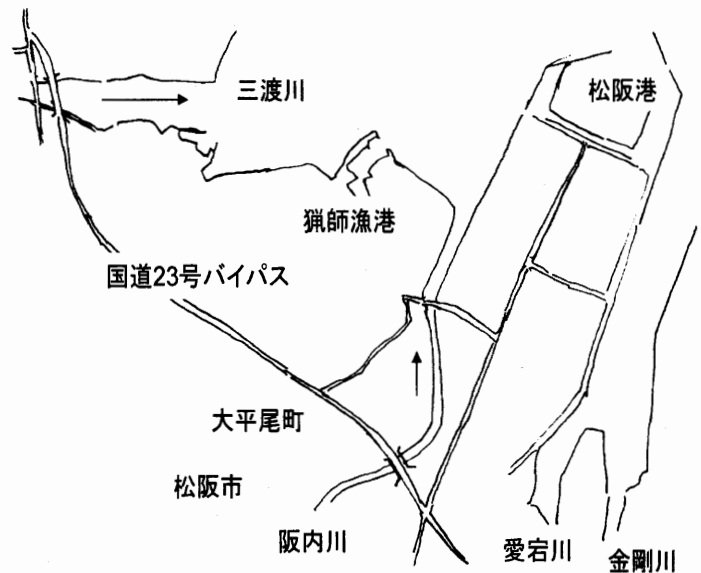


阪内川（さかないがわ）河口

岡八智子（津市）

津方面からは国道23号線をたどり、三雲からバイパスへ入り伊勢方向へ進み大平尾町の阪内川手前から左折します。阪内川左岸を川に沿って行くと獵師町に入り河口に出て先端の広い堤防に出ます。冬は カモやシギ達 ズグロカモメにも出会え潮が引いた時は遠いですが段々満ちて来ると近づいて じっくりと観察できる良い場所です。ここだけならこの道が早く行けますが、三雲の国道23号バイパスに行かず旧道を直進し、三渡川を超えて直左折すると カモ達が目の前に沢山出迎えてくれます。ヒドリガモが一番多く、オカヨシガモ・ヨシガモ・オナガガモ・マガモ等です。ここのガンカモ調査は大変だろうと何時も思います。ここでのアメリカヒドリを追っかけていますが、交雑個体ばかりで未だ夢を果たしていません。沢山のヒドリガモを波間に見ていると酔ってしまいそうです。昨年 干潮時にヒドリガモに混じってトモエガモを眼下に発見した時は本当に感動しました。やはり何時何の鳥と出会うか分かりません。又それが楽しい事でもあります。

三渡川右岸堤防道路 少し狭いので注意しつつカモを見ながら先へ進むと右堤防下の溜め池が数箇所ありますが、そこに思わぬシギ類に出会えるのでそれも楽しみの一つです。漁港を2つ通り過ぎその先が獵師町の広い堤防に出るのです。東を見る事になりますのでお昼からの方が見やすいかと思えます。又阪内川中流に沢山居るコガモの中にもしや“アメリカコガモ”とついついそちらの方も気になります。この冬も何度か通う事でしょう。



伊賀地方の探鳥地

田中豊成（名張市）

1. 名張市美旗（貴人塚周辺と西に延びる水田地帯で、一年を通じて探鳥できます。）
交通： 近鉄美旗駅より南方向400 m

春：ムナグロ ----- 5月の連休前後に多い年には数十羽の集団で飛来する。
キアシシギ ---10羽程度
チュウシャクシギ・メダイチドリ・ウズラシギ・タシギ等が通過する

ケリ・ヒバリ・ホオジロ・オオヨシキリ・セッカ・サギ類・タマシギ・カルガモ・バン・セキレイ類・カワラヒワ・キジ等が繁殖

- 夏：タマシギ・セッカ・オオヨシキリ・ホトトギス
- 秋：タシギ・ノビタキ・モズ・ハイタカ・セキレイ類
- 冬：チョウゲンボウ・ホオアカ・ハイタカ・オオタカ・コチョウゲンボウ・タヒバリ・タゲリ 等

（美旗は名張市桔梗ヶ丘の東で、伊勢側からは国道165号が便利でしょう = 編集部）



特集：三重県の探鳥地

(伊賀地方の探鳥地：続き)

2. 上野城公園 (主に冬期)

交通：近鉄伊賀上野市駅北300m・ 有料駐車場有
カラ類、イカル・メジロ・カワラヒワ・スズメは周年

夏： 夜間、コノハズクの声や時には飛翔も
冬： ツグミ・シロハラ・トラツグミ・ビンズイ・イカル・シメ・ルリビタキ・ジョウビタキ・アオバト (多い年には30羽程度)・大型ケラ類・アオジ・
稀にキクイタダキ・オオタカ

お熊ヶ池の紹介

西村四郎 (松阪市)

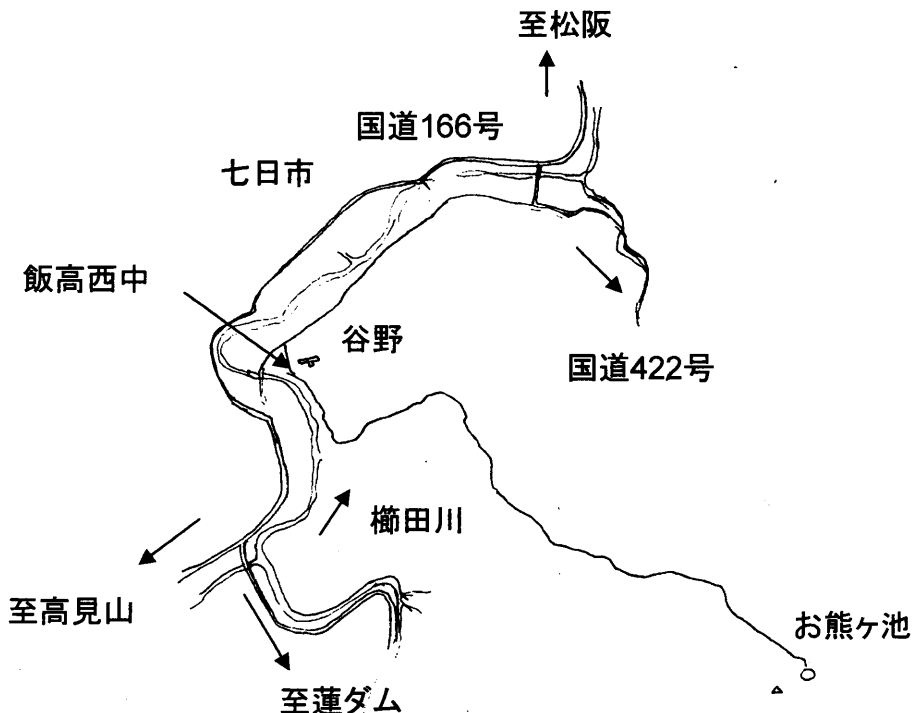
1年を通じて観察しているフィールドではないのですが、昨年(平成17年)10月1日に探鳥会を行った「お熊ヶ池」を紹介します。

ここは旧飯高町と旧宮川村のほぼ境の飯高側にあり、標高は740mで、山頂に池があり、日本最南端と言われている水芭蕉が咲きます。登山道までは、国道166号経由で松阪駅から約1時間くらいです。そこから山頂まで、歩きだと約2時間、車だと20分くらいでしょうか。ただし、勾配は急なところはあります。視界は割と開けており、見晴らしは良好です。

この最大の魅力は、車で頂上まで行けることです。駐車場は広く20台以上止めるのは可能で、そこから徒歩1分で「お熊ヶ池」があり

ます。池は広くなく、グルッとゆっくり一周しても20分くらいです。人にはほとんど会わないと思いますし(メジャーな場所でない)、お弁当を持って行くなどしてのんびり過ごすには最適です。体力も使いません。鳥類や植物の名前を紹介するデータは持ち合わせていません。探鳥会の記憶としては、クマタカがゆっくりと観察できたのと、アマツバメの風を切る音が印象に残っています。一度出かけてみてください。

(お熊ヶ池への道) 松阪方面からは国道166号線を西へ走り、旧飯高町富永で大谷橋(422号線)を渡って櫛田川の右岸(南岸)に渡りすぐに左に曲がり、谷野(たんの)の集落の飯高西中学で南へ入ります。(編集部)





九州御池、ヤイロチョウの森

森田えつ子（四日市市）

この探鳥ツアーに参加したのは、6月初旬の事でした。御池は、高千穂峰の麓にある周囲4kmの火口湖で、この御池に寄り添うように、広大な森が残されている。この森には、森の妖精「ヤイロチョウ」が子育てにやってくる。カラフルなヤイロチョウに会いたくて、14名が2台の車に分乗し、空港より御池の森へと直行した。森の入口に「ただ今、繁殖期ですから、観察は遊歩道から静かに・・・」と注意の看板が立っていた。私達は「森にお邪魔します」という意識を持ち、1列になり遊歩道を森に向かった。着いた先の森は、これこそ原生林。樹高20数メートルもありそうな樹木が天を被い、重なる緑の梢の間から、小さな空がチラチラと覗いている。

樹齢百年を超えるとされる常緑広葉樹が何本も目に入る。中でも観察小屋の近くに「イチイガシ」と名札を付けた巨木は、広げた枝々に「シノブ」を着生させ、森の主の風格を漂わせていた。私達は小さな観察小屋の四方の窓から、バードバスに来る鳥たちを静かに待つ。残念ながら姿は全く見せてくれなかったが、アカショウビン、キビタキ、サンコウチョウ、ツツドリ等の声が天から降るごとく聞かれ、それだけで満足だった。

夕方、湯の元温泉の宿に落ち着き、ホットしていると、キョロロロロ・・・とアカショウビンの声が、青田の広がる森からも届いて来た。

2日目、早朝4時半に宿を出発。まだ暗いなかを、今日こそ！ の思いで出発。遊歩道に入ると、早速キビタキのチンチロリンの声に出迎えられ、続いてメジロ、イカルの声。

一列に歩く私達の後方を歩いていたガイドさんが「ヤイロチョウが鳴いている！」と小声だが興奮ぎみの声をあげた。私達も立ち止まり、耳を澄ます。それらしき声が私の耳にも入った。皆、足早に声のする方へと遊歩道を進む。段々

と声の主近づき「ホヘン」「ホヘン」と1時間鳴き続けた後、声はぼったり止んでしまった。ヤイロチョウも地上に降りて食事のミミズを探しているのだろうか。私達も宿へ朝食を摂りに帰り、1時間余りして再び森に入ると、デジスコでバッチリとヤイロチョウを撮った方と出会った。「私達も朝食に帰らなければ見る事が出来たかもね。」と皆で残念がったが、皆の気持ちは、まだまだと、期待を十分に持ち、森の奥へと進む。

サンショウクイが少し濁った声で鳴きだした。これはリュウキュウサンショウクイと教えていただいた。その後はツツドリ、アカショウビン、アオゲラ、カケス、イカル、アオバト、サンコウチョウの声が遠く、近くに聞こえ、幸せな気分になる。遊歩道の右側、左側と視線を移してヤイロチョウの姿を求め歩いている時、遠く前方を低く横切った鳥がいた。これがヤイロチョウとの初めての出会で、あっけない程の一瞬の出来事で、色彩のないシルエットだけの出会いだった。その後も、遊歩道を行ったり来たり、ついにしゃがみ込んで待つが、出会えなく2日目が終わった。

今日は最終日、意気込んで、朝食のおにぎりを持って出発。森に入ると突然鹿の鳴き声に驚く。森へ進む途中、頭上から突然ヤイロチョウ



ムクノキ



の力強い鳴き声が降ってきた。昨日聞き慣れたヤイロチョウの声とは又少し違う声である。「ホホヘン」「ホホヘン」とホの音が小さく重なって聞こえる。その内に遠くでも「ホヘン」「ホヘン」と鳴く声が耳に届いた。2羽が鳴き交わしているようだ。頭上のヤイロチョウの姿を見ようと皆が夢中で見上げている。その時、重なる葉の間をシルエットが動く。移動したらしい。その後、ツツドリ、アオバト、イカル、トラツグミの声に混じって3羽目のヤイロチョウの声も遠くに聞いた。

この森には少なくとも3羽のヤイロチョウがいる事が確認できた。私達のグループ以外にも、連日、顔を合わせる人達がいる。毎年この時期に来ているご夫婦や、単独で何日も頑張っている人等々。この方たちから情報をもらう。遊歩道から数メートル森に入ったところにある朽ちかけ苔むした倒木に、ヤイロチョウが好んでくるといふ。私達はその倒木に目を注ぎつつ、静かに待つことにする。

数時間後、ついにヤイロチョウが道を横切り、2、3度地上へ降りながら倒木へと、移ったら

しい。その瞬間を数人の人が目撃した。

その時の様子を「何気なく振り向いたらヤイロチョウが目の前を横切ったのよ!」「左へ振り向いていたから見られなかったわ。」と大喜び、「赤と白の胸がはっきり見えた・・・」「茶色と青の羽が見えた」「2色見たから、フタイロチョウ」等々、感激の様子を語っていた。同じ場所に居ながら少し視線がずれただけで見られなかった私達も引き込まれて聞く。午後、去りがたい気分森を後にする事になったが、私達が御池に到着すると同時に、ヤイロチョウが鳴き始めたらしく、とてもラッキーだった。それに3日間で40数種の鳥たちの声を聞かせてもらった。

その後ヤイロチョウはどうしているでしょうか。カップルになって、子育てに専念しているのでしょうか。一人ひとりがマナーを守り、ヤイロチョウが繁殖できる環境が保たれるように願うばかりです。

あの感動の「ホホヘン」「ホホヘン」の鳴き声を県内でも聞けるようになったらいいなあ、と思った鳥見の旅でした。

「かきくけこ」は若さの秘訣

越川経男（津市）

数年前になるが、ある精神科医が老人の心のケアについて語った本の中に、覚えやすいフレーズがあった。若さの秘訣は、「か」「き」「く」



クスノキ

「け」「こ」と言うものであった。

大へんわかりやすくて印象に残ったので、その記事を読んで以来、私も自分なりに解釈してそれを実行している。名づけ方といい、内容といい、その時から私の老後の生活指針とすることとした。

「か」は感動の「か」

感じて動く。動く、さらに感ずる。するとまた動く。これが人間の活動原理であり、感動する心を持ちつづける人には、脳が老いる暇がない・・・とのこと。

私はリタイヤしてすぐ富士山に挑戦した。二度目の挑戦でやっと登頂できたが、その時の感動は今も忘れられない。富士山がきっかけでそのあと3000米級の山にも登った。立山登頂の時のことだが、忘れもしない9月29日、前日は一の越峠の山小屋に一泊した。翌日、目を覚まして驚いたことに一面の積雪。ところがそれが



ラッキーなことに一過性の初雪、東の空は雲一つない晴天。そのときの展望は今も脳裏を離れない。

槍、穂高が明けやらぬ空に黒々と影を落とし、南アルプスの北岳、甲斐駒が明け初めた空にほんのり浮かび、その左に富士のシルエット。自然の素晴らしさに感動した瞬間。この感動が出発点となって、私は今も山歩きを続けている。

5月になると、我が家では早朝から稀にけたたましい鳥の鳴き声で目が覚める。もう数年前になるが鶯の鳴き損ねくらいに思っていた。それがなんと「ほととぎす」と知ってたまげた。これをきっかけに日本野鳥の会へ正式に入会した。月1～2回、山野へバードウォッチングに連れってもらおう。さまざまな鳥の鳴き声や生態、渡り鳥の種類や習慣、教えられるたびに自然の不思議、素晴らしさに絶えず驚かされる。この原稿を書いている前日も低山の山歩きを愉しんだ。山頂の手前で、ほととぎすとうぐいすの共演に出会った。そのまま座り込んで暫し交響を独占した。まさに感動と至福のひと時である。

「き」は興味の「き」だ。好奇心のことと思っただけだ。

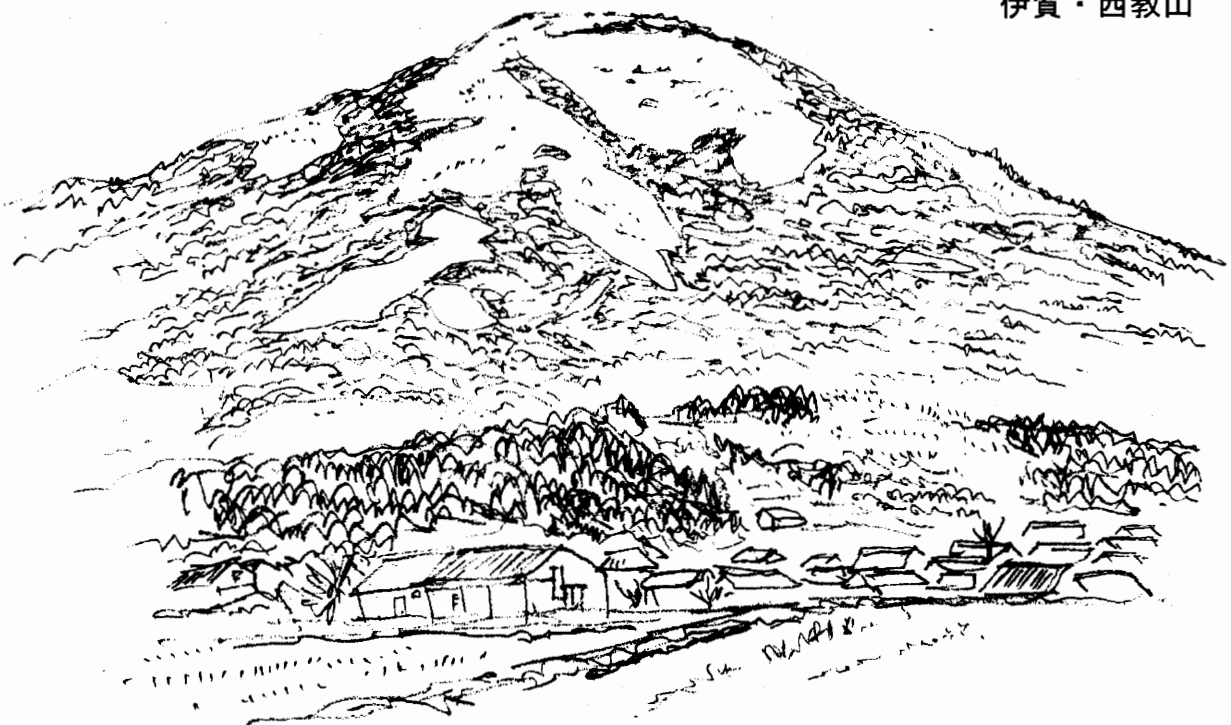
人は老いると身体を震わせる感動が少なくなる。とにかく自然の中に一步踏み出してみよう。そこには、今まで自分がわかっていたこととは違う世界が存在し、興味の対象となるものが沢山ある。そして感動を味わうことができれば、脳は自然と若返る・・・と。

餅して山ほととぎすほしいまま

杉田久女の名句である。山歩きの感動は連鎖反応を起こして、「ほととぎす」から今度は、俳句にも興味を持つこととなる。二年前である。団地の俳句の集いに入れてもらってから、ハマリ込むこととなった。NHKの俳句講座へ入会したり、俳句三重へも顔を出すこととなって、句会が重なることにもなったりで忙しい時もある。メンバーはほとんどが女性軍。大いに結構だと思っている。

数年前からパソコンを始めたのも単なる興味からだった。お蔭で今は、山の情報、野鳥のお誘い、俳句の交換と大いに若さの交流を愉しんでいる。

伊賀・西教山





会員のページ

昨年、俳句新年会の余興で会員の一人がハーモニカを聞かせてくれた。少し興味を覚えたので早速仲間へ入れてもらった。まだ一年生の新米だが、最近各種老人施設へ慰問演奏へも引っ張り出されている。お年寄りを前にすると、「明日はわが身かも」と思いつつも一生懸命吹奏する。これも若さを保つのに大いに役立っているように思う。

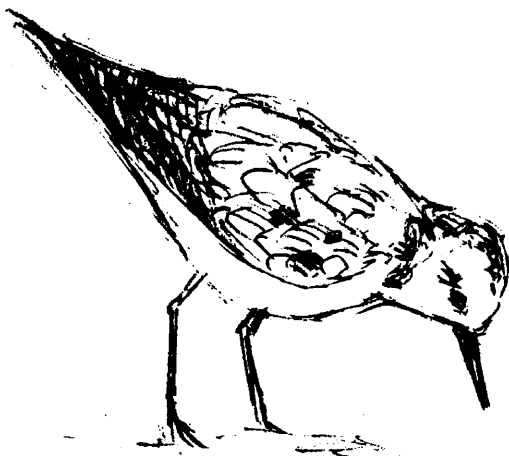
このように山歩きからホトトギス、時鳥から俳句、俳句からハーモニカ、パソコンと次から次へと連鎖反応して「若さ」を呼んでくれる。

つぎは、「く」。「工夫」のことだ。

人生は工夫の連続である。老後であっても人間関係、家族・・・生きておれば逃げたい時や、やり直したい時もある。だがリセットできないのが人生だ。困難をいかに工夫してのりきるか・・・。

私は数年前から朝食の準備を引き受けている。興味半分将来への備え半分で、飯炊き、味噌汁、目玉焼きからはじめて、最近は焼き飯、野菜炒めまでだんだんレパートリーを広げている。味噌汁や、野菜炒めは家内が作ったのより、私のほうがうまいところまで腕を上げた。火の強弱、だしの取り方、料理の時間、火を切るタイミングなど、やって見ると工夫次第で味が決まる。フライパンの手返しなどもマスターした。勿論、食後の洗い物、あと片付けも、朝食については私の責任範囲だ。お蔭様で何時一人になっても困らない準備が出来たと思っている。

ミュビシギ



しろちどり 52号

ところで最近、歳のせいで目覚めるのが早い。以前は、夜半に目覚めると時間を持て余した。本を読むこともあるが、最近は「NHKのラジオ深夜便」を聞くことが多い。午前三時の歌番組、四時から「心の時代」。特に心の時代は年配の人の献身的な社会活動や、ひたむきな研究生活など、さまざまな経験談を聞くことが出来て、老後の生き方に役立つことが多い。短夜の余白を埋めるのも工夫次第だ。

「け」は健康の「け」

生きてる限り何時までも健康でありたいと願うのは誰しも同じこと。老化だけは避けようがないが、心がけ次第、対応の如何によって大いに個人差が生まれるように思う。私は四年前、ご多分に洩れず狭心症を患って、冠状動脈にステントを挿入した。登山は低山に切り替え、山歩き以外の時はウォーキングで我慢している。耳鳴りも二三年前から始まった。加齢のためと半分諦め、首回しと舌回しは風呂の中で毎日続けている。足腰も人並みに弱ってきた。最近は不眠に襲われることがしばしば、これも加齢のせいと諦めて入眠剤のお世話になることもある。以上、健康については医師のお世話になりながら、曲がりなりに元気にしている。

もう一つ、健康で気になることがある。物忘れについてだ。大事な行催事も忘れることや思い出せないことがある。毎日のスケジュールは、居間の席から見える位置に大きく書く。日日の記録は日記に書くことでそれを防いでいる。ついでながら、尊厳死宣言と遺言書を、毎年、その日記の末尾に記載することになっている。家族に最後の混乱や負担をかけないための工夫だ。

最後が「こ」、「恋」のこと。

本の著者は、恋することが歳を問わず若さを維持する最高の秘訣だ、と教えている。

私の中学の友人で奥さんに先立たれ、時を待たずに恋した男がいる。今は夫婦のように付き合い合っているが、これが見事に友人を若返らせた。本の著者が最高の秘訣だと紹介したのも、むべなるかなと実感した。恋することが不都合



な人もあろう。そんな人には、恋でなくとも、「心ときめく」出会いがあれば十分だと付け加えていた。

私は先にも触れた山歩きで、お目にかかる二人づれのOL (old lady) がいる。二人とも美人で話題が豊富、話していて楽しい。今日は会えるかなと期待して登るのも「ときめき」のひと時だ。

また、パソコンで俳句を交歓する女性がいる。メールを交換するだけでお目にかかったことはないが、それが女性だと、受信した時なんとなく「心ときめき」を感じず。こんなお付き合いも若さを保つ秘訣だと感謝している。

須らく、大いに「恋」すべし。

霧ヶ峰探鳥旅行

斉藤加代子 (津市)

六月半ば、津地区のメンバーは霧ヶ峰の踊場湿原で、オオジシギのディスプレイを堪能した。

スピーヤク、スピーヤク、オオジシギの凄まじい声、三羽連れが湿原の空を制覇したように飛び回る。すごい勢いで羽を動かし続ける。長い嘴を開けて啼いているのだろうか？ 双眼鏡を離さず追っているが、私の目には見えない。ザザザ・真逆さまに猛スピードで急降下した。ダイナミック！ カミナリシギと言われる所以である。草原にかくれんぼしたオオジシギは、私たち十四人の鬼の目に捕まらない。

ノビタキが目立つところに何羽も止まる。こちらは美声、衣装もくつきりと美しい。カッコウの声が湿原を渡る。ノビタキに托卵したのかな？

ズミの木の白い花が満開だった。ズミの蕾は紅で開花すると白くなる。湿原の緑の濃淡にズミの木が散らばり、

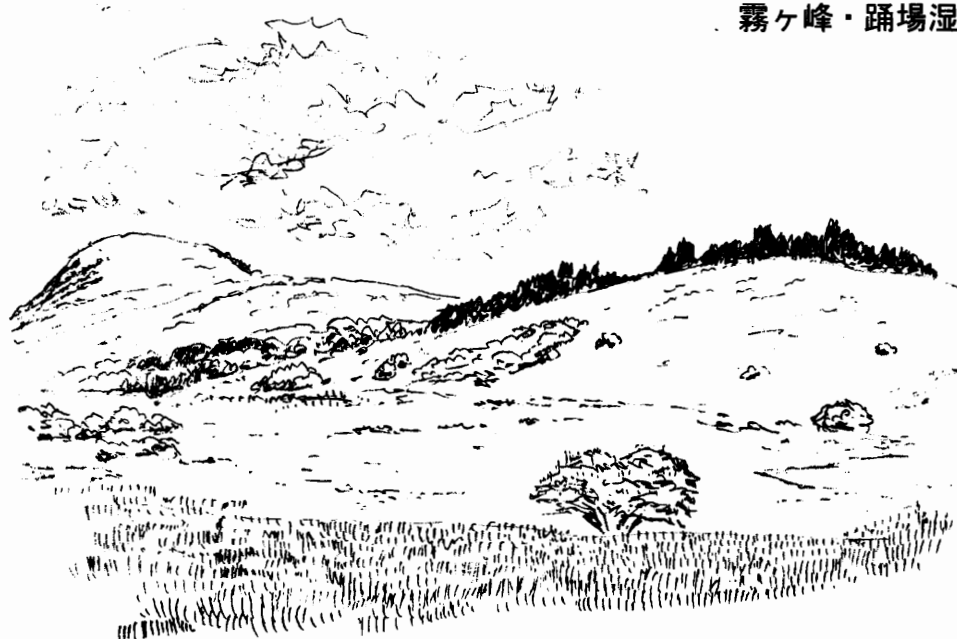
桜の季節のような景だった。

ロッジの夕食後は、今回の企画者K氏のギター伴奏で山の歌を次々合唱、ベランダから広がる湿原では、カッコウやノビタキが聞き惚れていた、かも知れません。



オオジシギ

霧ヶ峰・踊場湿原

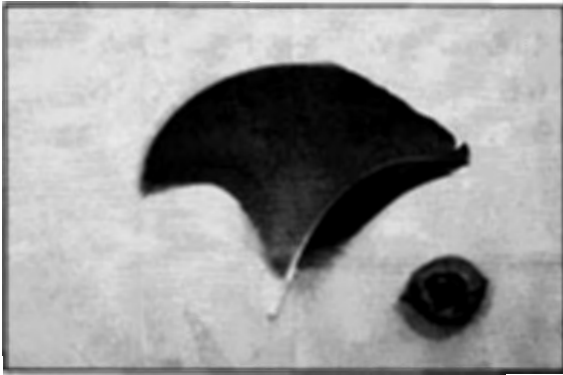




アートギャラリー

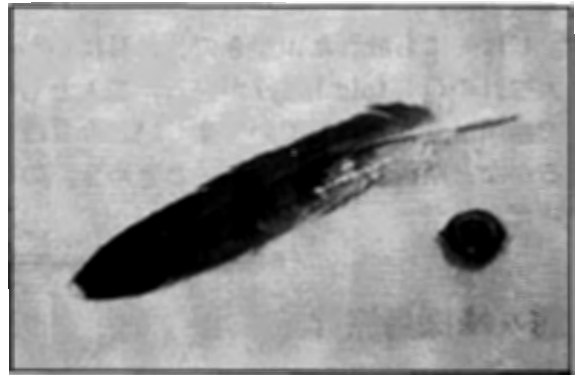
数少ない羽のコレクションの内、とりあえず人様にお見せできるようなものを集めてみました
リスにかじられたオニクルミの長径は約3cmです

橋本富三(津市)



オシドリ

通称イチョウ羽とよばれる、三列風切羽根の内一枚。メタリックブルーとオレンジのコントラストがとりわけ美しい。これを持っていると少し威張れる。



オオタカ

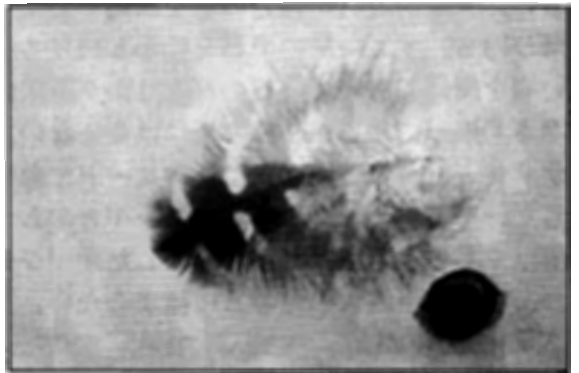
今年、三重県中勢地区の雑木林で、オオタカのヒナが二羽無事に巣立った。

写真の尾羽は津市のN氏からお借りした。



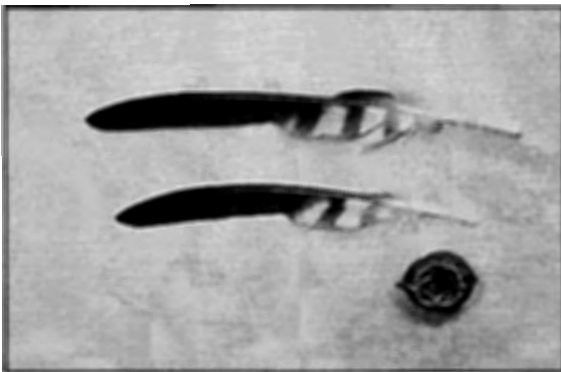
マガモ

濃い緑黒色に輝くカールした上尾筒の羽。みにしか見られない。オニクルミに手伝ってもらって羽を立ててみた。津市内のため池で採取。



イヌワシ

胸または腹の綿羽とおもわれる。この羽の大きさからイヌワシの巨大さが想像できる。三重県と奈良県の県境付近で採取。



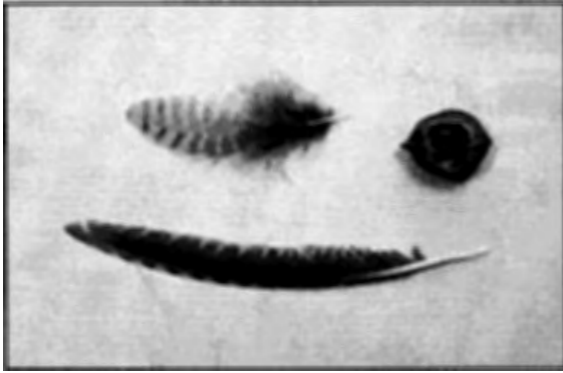
ハイタカ

誰に襲われたのか、右翼、左翼がそろって落ちていた。小さくてもタカ類の精悍さを漂わせる初列風切羽。津市内の公園で採取



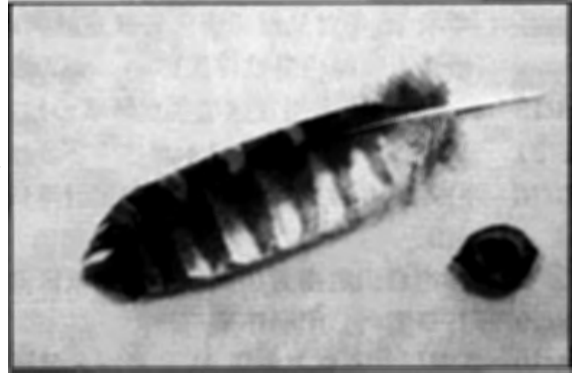
クマタカ

頂き物なので由来はわからない。でもこんなの自分で見つけたら、1週間は幸せでいられそうです。



ヤマシギ

この羽をくれた人がヤマシギだと言った。
でも私にはジシギ類はどれもおんなじに見える。
だから私はジシギ類は嫌いです。



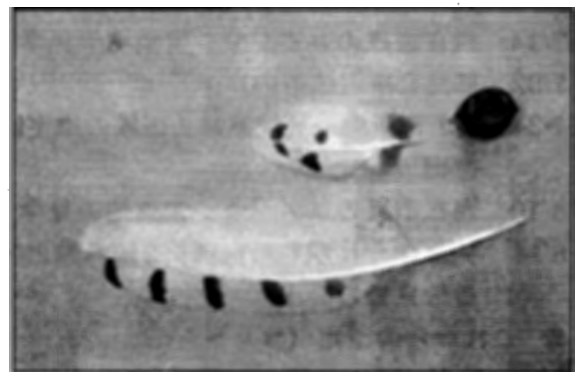
フクロウ

この羽の柔らかさはクセになると言う人がいた。さもありません。
その羽の柔らかさがクセモンだとリンゴ畑のネズミは言った。さもありません。



トラフズク

この羽を見ているとトラフズクと名づけた意味がよくわかる。
色も模様もベンガルトラにそっくり。
でも本当はベンガルトラを見たことは無い。
津市安濃町の河原で採取。



シロフクロウ

ご存知、ハリーポッターのペット、ヘドウィッグは、このシロフクロウ。
動物園で見たそのおとぼけ顔は笑える。
とある動物園で採取。これって反則？



アオバズク

毎年、お城の樹のウロで子育てしている。
水銀灯に集まる甲虫やセミが彼らのご馳走。
今年も無事子育てできるといいね。



カケス

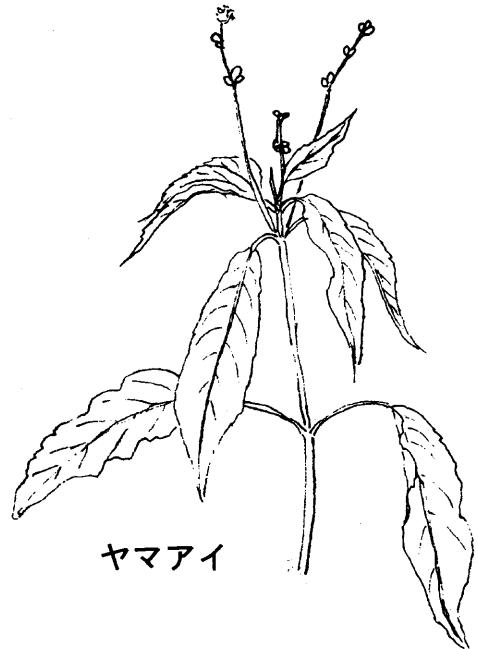
コバルトブルーが美しい、雨覆と次列風切。
オオタカの採餌跡で採取した。
羽の持ち主はオオタカのヒナの餌になった。
命は形を変えて受け継がれていく。



支部活動の記録(6月～8月)

事務局まとめ

- 6/7 平成18年度鳥獣保護区等設定計画について意見書提出
(伊勢市朝熊山鳥獣保護区他 全7通)
- 6/13 御浜町上市木指定猟法禁止区域の指定に係る意見書の提出
- 6/21 県委託カワウ調査・入札
- 6/26 平成18年度鳥獣保護区等設定計画について意見書提出
(津市白山町南青山高原鳥獣保護区他 全4通)
- 6/29 「行事案内」印刷作業
- 6/30 支部報しろちどり第51号発行・発送作業
- 7/4 四日市霞のコアジサシ営巣地の見学・対応協議①
- 7/6 四日市霞のコアジサシ営巣地の見学・対応協議②
- 7/7 鳥羽行者山風力発電計画の件で鳥羽市長と面談
- 7/12 平成18年度鳥獣保護区等設定計画の意見書提出
(木曾岬町木曾川中流銃猟禁止区域他 全3通)
- 7/14 四日市霞のコアジサシ営巣地の見学・対応協議③
- 7/22 部長会議(津市内)
- 7/24 桑名市下深谷部銃猟禁止区域の指定に係る意見書の提出
- 8/10 四日市霞のコアジサシ営巣地の見学・対応協議④
- 8/14 平成18年度明和町南部第2銃猟禁止区域の指定に係る意見書の提出
- これからの予定(9月～)
- 9/ シギ・チドリ調査(研究部)



ヤマアイ

理事会報告

事務局

第1回(2006年5月28日)出席者11名
(事務局)

○県委託カワウ生息調査:7.12.3月 それぞれ1回
コロニー・ねぐら10ヶ所 カウント調査 総会で協力者を募る。

○ホームページ(リンク):個人のHPは載せない。

(保護部・事務局)

○委託事業(契約済み)

平成18年度安部・七郷池地区県防ダム事業環境調査委託

※平成18年度鳥獣保護区等指定基礎調査事業委託

※平成18年度動植物鳥類調査業務委託

※平成18年度カワウねぐらコロニー調査事業委託 (※8月現在 契約済み)

重要な調査であれば、委託にかかわらず、調査費を出してはどうか?

たたき台を出す。

○保護問題:木曾岬干拓地、鳥羽行者山風力発電、現状報告(省略)



チュウヒサミット2006開催される

保護部・近藤義孝

全国6ヶ所のチュウヒの繁殖地・大規模越冬地で研究や観察を続けている研究者・観察者が名古屋に集まり、2006年6月24日、名古屋市東区愛知大学車道キャンパスにて「チュウヒサミット2006」を開催しました。オオタカなど森林に生息する猛禽については「オオタカシンポジウム」等、全国的な会合があり、また各地に専門に研究するグループがあり連絡を取り合っていますが、平地に生息するチュウヒについては全国的なつながりがなく、個々の研究者・観察者が独自に調査しているだけでした。今回は初めて全国的な情報交換の場となりました。

大串龍一金沢大学名誉教授による基調講演

石川県にある河北潟干拓地で30年以上にわたり、干拓地の動植物の変遷を観察している大串龍一河北潟湖沼研究所理事（金沢大学名誉教授）による基調講演の「河北潟干拓地の変遷」で始まりました。

放置された干拓地の植生が変化し、それにと

もないネズミの種類、生息数などが移り変わり、それに伴ってチュウヒの繁殖数も変化し、さらに、農地として利用されるようになり、多様な生物が現れ、変遷していくことが報告されました。

各地からの報告

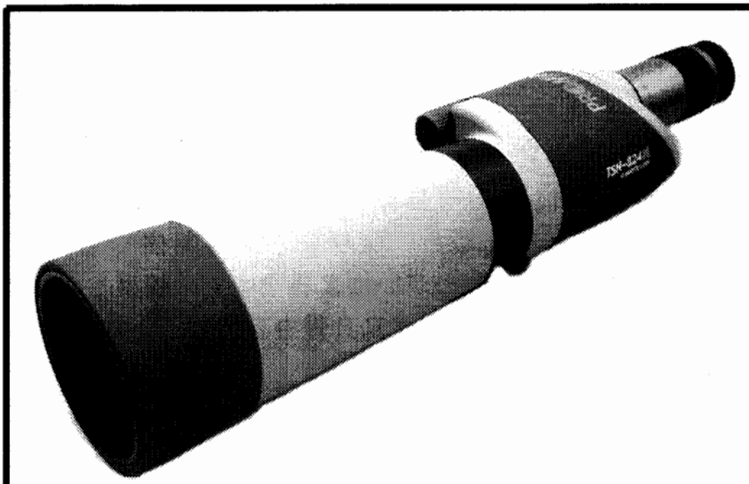
北海道勇払原野（財）日本野鳥の会自然保護室 浦達也氏 報告）

北海道苫小牧近郊の勇払原野では、チュウヒの繁殖が確認されています。大正時代以前は36000ヘクタール以上あった湿地が現在では10000ヘクタール以上に減少していることや、今後も大規模な開発計画があることなどチュウヒの繁殖場所や採餌場所が失われる懸念が報告されました。

青森県仏沼干拓地

（北里大学自然界部 多田英行氏 報告）

仏沼干拓地は、土地の多くを三沢市が所有し、ラムサール条約に登録され、チュウヒ以外にもオオセッカ・コジュリン・オオヨシゴイなど鳥類が観察されています。



取扱商品

- フィールドスコープ
- 双眼鏡(小型・大型)
- 天体望遠鏡
- カメラ(新品・中古)
- その他光学製品各種

取扱メーカー

KOWA・NIKON・FUJINON
MIYAUCHI・VIXEN・PENTAX他

中部地区最大の光学製品専門店

TELESCOPE CENTER EYEBELL

テレスコープセンターアイベル（株式会社アイベル）

〒514-0801 津市船頭町3412(メガネのマスダ2F) TEL 059-228-4119

定休日/毎週水曜日 営業時間/10:00~19:00

ホームページ <http://www.eyebell.com> メールアドレス eyebell@diamond.broba.cc



支部活動のページ

チュウヒの繁殖に影響するような懸念はとりたててなく、排水用ポンプの老朽化ぐらいです。

栃木県渡良瀬遊水池

(日本野鳥の会栃木県支部 平野敏明氏 報告)
渡良瀬遊水池は、3300ヘクタールと広大な湿地であるが、チュウヒは繁殖していません。越冬期にねぐらとして利用する個体数が最大39羽でした。繁殖が行われない理由としては、3月下旬に行われるアシ焼きが原因と考えられます。現在、開発計画は凍結されているが、再開が懸念されます。

ねぐら調査で採集されたペリットからチュウヒの餌となる動物は大型鳥類が38.6%、小型哺乳類が31.9%などとなっています。

三重県・愛知県木曾岬干拓地

(名古屋鳥類調査会 森井豊久氏 報告)
三重県と愛知県にまたがる木曾岬干拓地は、土砂を埋め立て、運動公園などを作る開発が今年から始まった。事業者である両県は干拓地南端に約50ヘクタールの保全区を設置する計画です。毎年数つがいの繁殖が確認され、冬季のねぐらとしても最大35羽のチュウヒが確認され、重要な場所です。また、チュウヒ以外にコチョウゲンボウも最大44羽がねぐらとして利用していました。

大阪府堺市埋立地

(日本野鳥の会大阪支部 納家 仁氏 報告)
堺市にある埋立地は、今まで繁殖の可能性がいわれていたが、サミット前の調査で幼鳥が確認されています。当地には共生の森を作る計画が

あり、チュウヒの生息環境が失われるおそれがあります。

石川県河北潟干拓地

(日本鳥類標識協会 中川富男氏 報告)
河北潟干拓地は、チュウヒが以前繁殖していた環境の多くが失われ、現在の繁殖個体は、以前から繁殖していた場所に執着し繁殖を続けているが、アシ原が少なくなり、繁殖が不可能になった場所もあります。現在は水路脇の狭いアシ原が営巣場所になっています。500羽以上のバンディング調査でチュウヒの年齢や虹彩の色の変化、チュウヒの雄・雌の体重差など多くのデータが示されました。

パネルディスカッション

最後にパネルディスカッションが行われました。本部自然保護室高井健慈と三重県支部平井正志がコーディネーターを務めました。ここでは、現在日本における繁殖は約30つがい、すなわち個体数で60羽くらいではないかという結論になりました。参加者からは今後もこのようなサミットを開催してほしいとの声がありました。最後にサミット宣言と木曾岬干拓地についての緊急アピールが行われました。

現地見学会

翌日、6月25日木曾岬干拓地で現地見学会が行われました。探鳥会と同時開催でしたが、チュウヒのつがいによる空中での餌渡しが観察できました(探鳥会報告参照)。

このサミットの予稿集を1000円(送料込み)で送ります。

チュウヒに関する各地の報告がまとめてあります。

必要な方は郵便小為替または、郵便切手1000円分を入れて、宛名明記の上で下記まで申し込んで下さい。

〒511-0123

三重県桑名市多度町北猪飼521

近藤義孝 宛





鳥羽行者山の風力発電（風車）建設予定地
における探鳥会の調査結果について

2006年4月24日
日本野鳥の会三重県支部
支部長 杉浦 邦彦

1. 日本野鳥の会三重県支部は4月22日（土）地元関係者を含め、探鳥会を兼ねた調査を行った。観察した鳥類は、ヒヨドリ、メジロ、ヤマガラ、シジュウカラ、シロハラ、ホオジロ、ウグイス、キビタキ、アマツバメ、コゲラ、エナガ、アオジ、オオタカ、トビ、ハシブトガラス、計15種類。

探鳥会終了後には、クマタカ（絶滅危惧種ⅠB類：EN）1羽を観察した。クマタカは、12時半ころ行者山南斜面の上昇気流をとらえて約5分間旋回しながら上昇していった。

探鳥会で確認されたオオタカ（絶滅危惧種Ⅱ類：VU）1羽も、行者山南斜面を旋回しながら上昇した。また地元住民からは数日前に、下面の白いタカをみたとの話を聞いた。これはオオタカ成鳥である可能性がきわめて高い。現在は猛禽類の繁殖期であり、オオタカがこの地域で繁殖している可能性はかなり高い。

クマタカは1999年繁殖期である1月から6月に伊勢市矢持地区の山林で数回観察されている。行者山周辺で繁殖している可能性もある。いずれにしてもこの2種の猛禽類が繁殖期の餌場として行者山周辺を利用していることは明らかである。

今回鳥羽ウインドファームから出されている調査報告では、猛禽類の調査は10月の5日間だけの飛翔目視調査と、古巣を探した調査のみであり、繁殖期の調査は全く行っておらず、繁殖調査が不可欠であることが今回の観察で明らかになった。

もし、この2種のうちいずれかでもこの地域で繁殖しているなら、風力発電建設により、繁殖活動が阻害される。前回指摘した猛禽類の渡りに対する影響のみではなく、繁殖そのものが困難になる可能性がきわめて高い。以前3月21日に提出した文書において指摘した鳥類生態調査の不備が今回さらに明らかになったといえる。

2. 現地を視察した結果、建設用道路の整備、風車の土台の整備などで移動させられる土砂の量が膨大であり、現状の山林がかなり大規模に失われるであろうことを確認した。

また現地は蛇紋岩地帯であり、崩落しやすく、大雨などによる二次災害の危険性も高い。したがって、直接風車への衝突等の問題だけでなく、渡りの中継地であり、繁殖地である可能性のある山林が建設によって大幅に改変され、鳥類の棲息に大きな影響をおよぼす可能性がきわめて高い。

よって当該地域での風力発電建設に反対の意見を再び表明するものである。以上

カラスの帰還





支部活動のページ：野鳥記録

鳥羽ウインドファームが経済産業省への申請を今回は取り下げ。

鳥羽ウインドファーム株式会社は同市行者山に3基の風力発電を建設するため、今年春に経済産業省に「新エネルギー事業者支援対策事業」の認定を受けるべく申請していました。順調に進めば8月末には大臣認定が受けられ、国から風力発電建設のための補助金が交付され、NEDO技術開発機構から債務保証が得られるはずでした。しかし、8月末同社は申請を取り下げました。詳しい理由については明らかにされませんが、野鳥の会三重県支部、同本部や地元鳥羽の自然と環境を守る会の反対運動、町内会の反対などが影響したことは確実です。また建設

予定地は国立公園内のため、自然公園法などをクリアすべき必要があり、その上建設用道路の確保が難しいなど困難も多く、今回は断念したものと考えられます。日本における風力発電のほとんどは経済産業省・NEDOの補助金や債務保証に頼って建設されており、同社が補助金や債務保証を受けずに自力で風力発電を建設することはまず不可能です。しかし、今年は準備不足で建設を断念したものの建設計画そのものを破棄したものではありません。来年申請が出されることは大いに考えられるので今後も反対運動を盛り上げる必要があります。

なおこの鳥羽行者山での風力発電建設問題については日本野鳥の会本部も会長 柳生博名で5月26日、経済産業省、環境省などに計画の変更、見直しを申し入れています。(文責：平井)

野鳥記録

種名	個体数	記録日	記録場所	記録者	メモ	写真の有無
オオアジサシ	15	2006/6/10	三重県熊野市井戸町七里御浜海岸～有馬町七里御浜海岸	中井 節二・今井光昌		有
クロハラアジサシ	8	2006/6/17	南牟婁郡御浜町	小瀧賢作	18日にも確認、成鳥1, 幼鳥7	有
ウチヤマセンニュウ	1	2006/6/21	尾鷲市矢濱	中井 節二	鳴き声で確認	無
アカガシラサギ	1	2006/7/6	熊野市有馬町葦原	中井 節二		有
ミヤコドリ	2	2006/7/26	四日市市磯津町	安藤 宣朗	干潟で採餌中	有
アカガシラサギ	1	2006/7/29	御浜町市原	中井 節二	冬羽	有
ミュビシギ	58	2006/8/20	津市栗真町屋町	橋本 富三	うちフラッグ2羽(注参照)	有

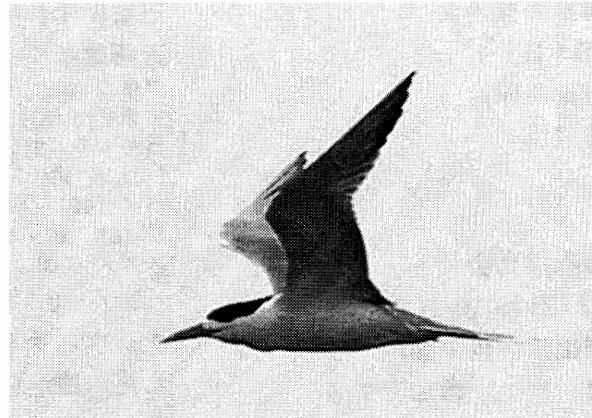
注：フラッグ2羽 ①右関節上：橙、右関節下：黄 左関節下：足環 1羽

②右関節上：橙、右関節下：足環 1羽

ミュビシギのフラッグはオーストラリアで付けたもの、以前も津市、町屋海岸で発見されている。

右：フラッグをつけたミュビシギ：
橋本富三撮影





オオアジサシ：
中井節二撮影

探鳥会報告

2006年5月～2006年6月

● 朝明源流探鳥会

2006年5月7日(日)

菰野町大字千草(通称：朝明溪谷)

辻 秀之 川口久美

雨天のため中止

● 青山愛宕神社探鳥会

2006年5月7日(日)

伊賀市青山高原・奥山権現

前澤昭彦 塗矢尋一

雨天のため中止

● 海蔵川探鳥会

2006年5月16日(火)

四日市市西坂部町(海蔵川中流)

尾畑玲子 高 和義

雨天のため中止

● 美杉探鳥会

2006年5月20日(土)16:30-20:30

：津市美杉町川上(通称：三重大学演習林)

坂元伸治 中村洋子 参加者 10名

(会員9名 会員外1名)

アオサギ、キジ、キジバト、アオバト、ジュウイチ、ツバメ、キセキレイ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、モズ、トラツグミ、キビタキ、エナガ、ヒガラ、メジロ、スズメ、カケス、ハシボソガラス。 18種

雨の降り続く中での1回きりの降り止みの中での会で、ほとんど何の声も聞けない最悪の状態でした。6月初旬に今後戻さないといけないうです。

● 木曾崎干拓地探鳥会

2006年5月28日(日)

(共催団体 愛知県野鳥保護連絡協議会)

三重県木曾岬干拓地・愛知県鍋田干拓地

米倉静

参加者 9名

カワウ(50)、ダイサギ(6)、チュウサギ(1)、コサギ(5)、アオサギ(7)、マガモ(2)、カルガモ(12)、ミサゴ(2)、トビ(1)、チュウヒ(2)、キジ(20)、コチドリ(3)、ケリ(30)、イソシギ(1)、コアジサシ(8)、キジバト(5)、カワセミ(1)、ヒバリ(20)、ツバメ(5)、ハクセキレイ(1)、ヒヨドリ(2)、オオヨシキリ(10)、セッカ(30)、カワラヒワ(5)、スズメ(50)、ムクドリ(15)、ハシボソガラス(30)、ハシブトガラス(10)、ドバト(30)。 計29種

セッカの全身を詳しく観察できた。田の中をよちよち歩くケリのヒナが観察できた。

● 錫杖ヶ岳探鳥会

2006年6月4日(日)9:30-15:00

津市芸濃町

川口久美 岡八智子 参加者19名

(会員12名 会員外7名)

トビ、ツツドリ(声)、ホトトギス(声)、アマツバメ(2)、アオゲラ(声)、アカゲラ(声)、コゲラ(声)、ツバメ、キセキレイ、ヒヨドリ、カワガラス(2)、クログミ(声)、ヤブサメ(声)、ウグイス(声)、オオルリ(声)、ヒガラ(声)、メジロ(声)、ホオジロ、イカル(声)、カケス、ハシボソガラス(声)、ハシブトガラス(声)。 計22種

樹林帯の登山道を歩く探鳥会ということで殆どがリスニング探鳥となったのは予想どおりであった。参加者に会員外の方が多かった事、家族での参加が目立った点、担当者を喜ばせた。



探鳥会報告・編集後記

● 曾爾高原と屏風岩探鳥会

2006年6月11日(日)

奈良市曾爾村(曾爾高原)

小林達也 田中豊成

雨天のため中止

● 鎮守と公園の森探鳥会

2006年6月18日(日)9:10-11:00

松阪市甚目町 雲出川河川公園内

福井 勝 西村 泉 参加者7名

(会員7名 会員外0名)

カワウ、ゴイサギ、ダイサギ、コサギ、アオサギ、トビ、キジ、キジバト、ホトトギス、コゲラ、ヒバリ、ツバメ、ヒヨドリ、ウグイス、オオヨシキリ、セッカ、ホオジロ、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス。 計22種

今回の特色 ①鉄橋(JR)が野鳥のアパートになっていて、いくつかの巣跡が見られる。②キジが2組ほど見られヒナドリを4羽程見る。③ホトトギスのさえずり、フライングを確認。当地はムクドリ、ヒヨドリ、ホオジロが多い普通の場所に思えたが意外に数も多くエサ関係の虫、実が多く、又環境が公園や森のような所もあり、冬場での企画の声もありました。

● 木曾崎干拓地探鳥会

2006年6月25日(日)

(共催団体 愛知県野鳥保護連絡協議会)

編集後記

静岡にいたころ、富士川の広々とした河川敷の葦原でその上をゆったりと飛ぶヨシゴイをみた。この夏ヨシゴイを再び見たいと思い、葦原を求めてさがし回った。三重県に大きな川はいくつかあるが、葦原は以外と少ない。ヨシゴイも見ることができなかった。あの鳥はもういなくなったのか？それともどこか誰も知らないアシの中でひっそりと子育てをしているのだろうか？もうヨシゴイも南へ渡る季節になった。彼らの越冬地は無事なのであろうか？来年の夏またヨシゴイを探ることになるだろう。(MH)

三重県木曾岬干拓地・愛知県鍋田干拓地

近藤義孝 村田芳雄 参加者 9名

カワウ(60)、ゴイサギ(1)、ダイサギ(3)、コサギ(2)、アオサギ(5)、カルガモ(30)、チュウヒ(2)、キジ(15)、コチドリ(2)、ケリ(12)、イソシギ(3)、コアジサシ(4)、キジバト(6)、カワセミ(2)、ヒバリ(20)、ツバメ(10)、ハクセキレイ(2)、モズ(1)、オオヨシキリ(5)、セッカ(20)、ホオジロ(1)、カワラヒワ(5)、スズメ(50)、ムクドリ(50)、ハシボソガラス(120)、ハシブトガラス(20)、ドバト(7)。 計27種
チュウヒサミットの現地視察もかねて実施しました。雄から雌への餌渡しなども観察できました。

ミツバ



しろちどり 52号

2006年10月1日発行

題字： 濱田 稔

表紙絵： 小坂里香

カット： 平井正志

編集： 平井正志 514-2325

津市安濃町田端上野 910-49

発行所： 日本野鳥の会三重県支部

杉浦邦彦方

516-0026 伊勢市宇治浦田2丁目9-4

<http://www.amigo2.ne.jp/~miebirds/>

印刷：伊藤印刷株式会社